

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：日本語日本文学科

資格：准教授

氏名：羽生 紀子

研究分野	研究内容のキーワード
日本近世文学, 日本出版文化史	井原西鶴, 浮世草子, 出版文化
学位	最終学歴
博士（文学）, 修士（国語国文学）, 学士（国文学）	武庫川女子大学大学院 文学研究科 国語国文学専攻 博士後期課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 国文学研究（古典）理解のための教育の実践	2018年04月～現在	「日本古典文学概論」（大日1年必修）では、国文学の歴史や学問としての体系に関する知識の習得を目指している。学的体系の理解を通して、日本語日本文学科で4年間学ぶ意義について再認識する機会ともなるよう、常に学生の問題意識の喚起を図っている。
2. 日本古典文学の読解力養成のための教育の実践	2014年04月～現在	「古文入門」（大日1年必修）では、専門的な国文学研究を行うための古文読解力の養成を目指している。毎回、作品の一部分を学生自身の力で読解し、その文章の背景や意味を考えることにより、文学作品として読み込む力の修得を図っている。
3. 文章力養成のための教育の実践	2012年04月～現在	学生の実践的な文章力の養成を図る。教員による単なる添削指導ではなく、自らの気づきに基づく総合的な文章能力の向上を目指している。「日本語表現演習」（大日2年必修科目（2年次演習））で実践している。
4. 大学院の論文指導および研究題目	2011年04月～2013年03月	2012年度修士論文研究指導 修士論文題目「『御伽文庫』の刊行事務—渋川清右衛門の活動と『御伽文庫』の本文—」
5. 情報処理技術を活用した日本近世文学研究の実践的指導	2008年04月～現在	演習では、従来の古典文学研究の手法だけではなく、より積極的に各種データベースを駆使して情報処理を行い、研究に活用するように指導している。社会で役立つ実践的な能力の養成を目指している。

2 作成した教科書、教材		
1. 日本近世文学を理解するための教材の作成	2016年04月～現在	日本近世文学の本質的な理解のために、時代背景や作者についての解説および主要作品の一部本文について、独自の教材を作成している。「近世文学講読」（大日2年）、「近世文学研究」（大日3年）などで活用している。
2. くずし字の読解力養成のための教材の作成	2016年04月～現在	専門的な国文学研究には欠かすことのできない「くずし字」を解説するスキルの養成を目指して、独自の教材を作成している。「古文入門」（大日1年必修）や古文関係の授業で活用している。
3. 卒業論文作成のための手引きの作成	2015年04月～現在	スムーズに卒業論文の作成に導くために、ゼミ独自のマニュアルを作成している。基礎調査の方法、論理的な文章の具体的な書き方など、わかりやすく解説している。「演習Ⅰ」（大日3年必修）、「演習Ⅱ」（大日4年必修）、「卒業論文」（大日4年必修）で活用している。
4. 日本古典文学の全体像を理解するための教材	2012年04月～現在	日本古典文学の全体像を把握するために、各時代のメディアの特徴や時代背景、主要作品について独自の教材（プリント）を作成している。「日本文学概論」（大日1年必修）、「日本文学入門」（短日1年必修）などで活用。

3 実務の経験を有する者についての特記事項		

4 その他		
1. 学友会活動での学生支援	2006年04月～現在	学友会の演劇部部長を務めている。
2. 国文学会運営への参画・協力	2005年04月～現在	国文学会は学科の学部生、大学院生、教員、卒業生によって組織されている研究親睦団体である。各種行事の企画・運営や会報の制作等に協力している。学生の自律的な活動へと発展するように努力している。
3. 高校での模擬授業等	～現在	2017年10月 京都府立鳥羽高校 2017年7月 西宮北高校 2017年5月 神戸学院大学附属高校 2017年2月 大阪国際滝井高校 2016年10月 伊丹北高校 2016年7月 社高校 2016年3月 大阪学芸高校 2015年7月 愛徳学園高校 2014年7月 須磨高校

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要

1 資格、免許		
1. 博士（文学）	1999年03月20日	武庫川女子大学において取得（第25号）。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2. 修士（国語国文学）	1996年03月23日	所定の単位を修得し、修士論文「『諸艶大鑑』論－作者と書肆の相関－」を提出したことによる。
3. 図書館司書資格	1994年03月19日	平5大第33号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 人権教育推進委員会研究委員	2017年04月～現在	文学コースやマスターコースなど、講座を担当した。 学科企画の運営に協力している。
2. 学院史資料調査学科委員	2016年04月～現在	
3. 諸資格対策委員（教職支援委員）	2013年04月～2016年03月	
4. 大学院文学研究科委員	2011年04月～2017年03月	
5. 教務委員	2010年04月～2013年03月	
6. 西宮市生涯学習大学「宮水学園」講座	2008年09月～2014年12月	
7. 広報入試委員	2007年04月～2010年03月	
8. 教育懇談会への参加	2006年～現在	
9. 学生委員	2005年04月～2007年03月	
10. オープンキャンパス（学科企画）への協力	2005年～現在	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 江戸時代の社会風俗がわかる 浮世草子大事典	共	2017年10月	笠間書院	長谷川強監修。江戸時代の浮世草子作品をはじめ、人物やさまざまな事項を項目化することにより、江戸時代の社会・風俗についての理解を深めることができる事典。執筆項目は、『椀久二世の物語』（pp. 855～856）、『好色影倣子』（pp. 311～312）、『けいせい庵照君』（pp. 258）、『武道近江八景』（pp. 742～743）、『けいせい哥三味線』（pp. 254～255）、『世間侍婢気質』（pp. 517～518）、『西鶴本の書肆』（pp. 51～52）。
2. 近代大阪の出版	共	2010年02月	創元社	羽生紀子、平野翠、青木育志、石田あゆ、旭堂南陵、吉川登、小野高裕、大谷晃一、増田のぞみ共著 江戸時代の大坂は本の都市であった。本の都市として機能した大坂を創り出した本屋仲間の役割について、具体的に明らかにした。（pp. 1～26）
3. 狂歌浦の見わたし（「近世上方狂歌叢書」29）	共	2002年03月	和泉書院	西島孜哉共編 「狂歌浦の見わたし」（編蝠軒魚丸発起。文化9年（1812）刊行）の翻刻を担当（pp. 1～51）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
4. 狂歌よつの友（「近世上方狂歌叢書」28）	共	2001年03月	和泉書院	西島孜哉共編。 「除元狂歌小集」（雄崎貞右撰。天明3年（1784）刊行）、「除元狂歌集」（雄崎貞右撰。天明5年（1786）刊行）の翻刻を担当（pp. 39～63, pp. 88～109）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
5. 西鶴と出版メディアの研究	単	2000年12月20日	和泉書院	武庫川女子大学に提出した博士（文学）学位論文を出版したもの。 近世中期の浮世草子作者井原西鶴の創作活動と、出版環境との相関について論じた。西鶴の関わった書肆（岡田・森田）や大坂出版界の状況を明らかにし、西鶴の作家的成長に出版メディアが大きな役割を果たしていたことを具体的に論じた。 平成12年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）助成図書。第22回（2001年）日本出版学会賞奨励賞受賞。
6. 狂歌泰平楽（「近世上方狂歌叢書」27）	共	2000年03月30日	和泉書院	西島孜哉共編。「除元狂歌小集」（雄崎貞右撰。天明3年（1784）刊行）、「除元狂歌集」（雄崎貞右撰。天明5年（1786）刊行）の翻刻を担当（pp. 39～63, pp. 88～109）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
2 学位論文				
1. 西鶴と出版メディアの研究	単	1999年3月25日	武庫川女子大学	博士（文学）学位論文。
3 学術論文				
1. 「三方一両損」の継承—『本朝桜陰比事』から『大岡政談』・古典落語へ—	単	2018年03月13日発行	武庫川国文 第84号	大岡越前の名裁きとして知られる「三方一両損」は、井原西鶴が『本朝桜陰比事』において『板倉政要』を批判的に撰取し、改変することによって成立したものであった。その後、「三方一両損」は『大岡政談』において大岡越前の名裁きとして取り上げら

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 「聖人公事之捌」から「落し手有拾ひ手有」へ—『本朝桜陰比事』の価値基準—	単	2018年02月20日	日本語日本文学論叢第13号	れ、さらに古典落語でも、この大岡裁きは継承される。西鶴が否定的に継承した「三方一両損」の復活について、町人社会及び町人観の変化を通して考察するとともに、西鶴の特質・独自性を明らかにした。(pp23~33) 「三方一両損」は『板倉政要』『聖人公事之捌』に原型がみられる。井原西鶴は『本朝桜陰比事』『落し手有拾ひ手有』において、板倉伊賀守の裁きを家老の「三方一両損」の話に作り変え、それを現実に対する認識が不足した浅知恵ともいうべきものとして描いた。「聖人公事之捌」の解決法は、金銀を重視する町人観からは受け入れ難かったのであり、生ぬるい仲裁よりも、善悪・白黒を峻別しようとする厳しい価値基準で西鶴は「三方一両損」を誕生させたのである。『桜陰比事』は、西鶴の新しい町人観によって創作された、都市文学といえることを明らかにした。(pp37~51)
3. 世之介と中居女—女を見る行為の近世的転換—	単	2015年03月	日本語日本文学論叢第10号	『好色一代男』巻1の3「人には見えぬ所」において世之介は、仲居女の行水姿を遠眼鏡で覗き見する。従来それは、昔男や師直の近世的なパロディであると指摘されてきたが、『太平記』等のあり方と比較検討により、その世之介の行動には、新しい都市の共同体のあり方が示されていることを明らかにした。また、中居女の行水や自慰行為が、『太平記』に描かれる、高師直が奥方の風呂上がりの姿を見に行った部分から導きだされたものであることについても指摘した。(pp35~47)
4. 世之介の恋文—近世都市文学としての再生—	単	2013年03月5日	日本語日本文学論叢第8号	『好色一代男』巻1の2「はづかしながら文言葉」は、世之介の早熟さを示すエピソードととらえられてきた。本稿では、「手紙」というアイテムに着目し、当時の他作品における「手紙」のあり方との比較検討等から、西鶴が近世の新しいコミュニケーションツールとしての「手紙」に着目し、新しい価値観を描いていたことを明らかにした。(pp15~28)
5. 浮世草子の都・大阪—西鶴の浮世草子と出版界の変質—	単	2012年01月10日	大阪春秋 145号	浮世草子が生み出された状況について、西鶴と大坂の出版書肆の動向から検討した。さらに大坂で浮世草子が衰退していく状況について考察した。(pp. 28~33)
6. 『滑稽浪花名所』と歌川芳梅—歌川派の上方進出—	単	2009年03月	関西文化のメカニズム(関西文化研究叢書10)	江戸時代の浮世絵師である歌川芳梅・芳豊の活動について考察した。芳梅は江戸に下って歌川国芳に師事した絵師であった。江戸の絵師に師事した上方絵師の帰坂は、上方の浮世絵界に大きな変質をもたらしたことについて論じた。また武庫川女子大学附属図書館蔵『滑稽浪花名所』を紹介した。(pp. 49~69)
7. 大阪の人々の拠りどころ—天下の台所—	共	2008年11月	日本と中国の基本的人間文化—その普遍と個別—(関西文化研究叢書8)	西島孜哉共著。江戸時代前期・中期の大阪町人のあり方について、西鶴の町人物作品の検討を通して論じた。江戸時代前期の大阪の都市としての発展について整理した上で、西鶴の町人物に描かれている人々や町の様子を分析した。その結果、大阪の経済都市としてのあり方が、当時の大阪町人にとっての精神的支柱であったことを明らかにした。(pp. 3~7)
8. 西鶴作品にみられる中国説話—その日本化の様相—	共	2008年11月	東アジアにおける文化交流の諸相(関西文化研究叢書9)	西島孜哉共著。西鶴作品にみられる中国説話撰取の具体相について考察した。西鶴当時、中国の書物は数多く日本に入ってきていたが、西鶴の撰取方法について具体的に検討すると、西鶴は原典そのものからではなく、日本化された中国説話を撰取していることが明らかとなった。そして西鶴が作品化する際には、それらの中国説話を単なる儒教の倫理としてではなく、現実的な町人の思想として吸収・融合させているのである。(pp. 45~55)
9. 西鶴の世界観—女護島と額縁城—	共	2006年09月	人間文化の諸相と東アジア—異文化とは何か—(関西文化研究叢書4)	西島孜哉共著。(pp. 2~11)
10. 貞享三年の池田屋岡田三郎右衛門—森田庄太郎との提携と『好色一代女』の刊行—	単	2006年06月	西鶴と浮世草子研究第1号	版下書き、挿絵師のあり方の検討から、岡田三郎右衛門が貞享3年(1686)3月刊行の『外科衆方規矩』をポイントとして森田庄太郎との提携を成立させ、商業的に完成された印刷制作プロセスを手に入れたことについて論じた。大坂の大書肆として成長していく岡田の活動の中で、貞享3年が転換期であったのである。(pp. 71~81)
11. 上方浮世絵の周辺—武庫川女子大学所蔵コレクションと流光齋—	単	2006年03月	関西文化の諸相(関西文化研究叢書1)	流光齋の絵師としての活動の地盤として丸派狂歌サークルが関わっていることを指摘し、この交友関係が画業に影響していた可能性について論じた。また、丸派狂歌サークルには歌舞伎役者と思われる人物が多数参加していることについても指摘した。丸派

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 西鶴の創造世界―「天下の台所」 「仕出し」をキーワードに―	共	2006年03月	関西文化への視座―享受と独創の間―（関西文化研究叢書2）	では歌舞伎の最頂であった富裕な町人が中心的狂歌師として活躍しており、芸能の土壌としての狂歌サークルという角度からも、今後考察を進めることが必要なことが明らかとなった。（pp. 146～159） 西島孜哉共著。 （pp. 80～103）
13. 『戯動大丈夫』『川童一代噺』の 絶版をめぐる―大坂屋佐七と絵 入り出版物―	単	2005年01月	鳴尾説林 12号	『川童一代噺』（1794序）『戯動大丈夫』（1794序跋）の絶版は、「行跡不宜候書」として版行の申請を却下されたものを内証版行・素人版行したことの結果であった。その結果だけを見ると、絶版は当然の処置であった。しかしながら、版元である大坂屋佐七、阿波屋清次の動向、さらに絵入り出版物をめぐる当時の大坂出版界の状況を視野に入れると、そこには既存勢力の新興書肆への妨害がみられるのであった。（pp. 1～10）
14. 流光斎・春朝斎・桃溪と狂歌―丸 派狂歌サークルへの参加―	単	2004年03月	武庫川国文 63号	上方浮世絵の祖流光斎如圭、名所図会の挿絵師として名高い竹原春朝斎とその師坂本春汐斎、版本の挿絵や一枚刷りを数多く制作した丹羽桃溪の狂歌および丸派サークルとの関わりについて報告した。いずれの絵師についても、その具体的な経歴や作画環境についてはこれまでほとんど知られていない。丸派狂歌集への入集を確認したことで、その一端が明らかとなった。また丸派での人々との交流が絵師・丸派狂歌の双方に相互に影響するものであったことを考察した。（pp. 28～37）
15. 嵐璃寛と丸派狂歌―「月並の雅 蕨」への参加―	単	2003年12月	鳴尾説林 11号	江戸時代後期の上方で最大の狂歌サークルであった丸派サークルに参加するさまざまな階層・職種の人物の中で、本稿では歌舞伎役者初代嵐璃寛（明和6年（1769）-文政4年（1821））とその他幾人かの歌舞伎役者と丸派との関わりについて報告した。この時期、丸派狂歌サークルは狂歌壇という特殊な文壇を構成するのみではなく、さまざまな側面に関わる文化サークルとして機能するようになっていた。丸派狂歌サークルの周辺ではビジュアルな出版物への志向が顕著であり、その志向を実現する場として、月並の雅蕨が機能していたと結論した。（pp. 1～11）
16. 「日本」へのまなざし：1801-1919 年―日本関連書の刊行点数の推移 ―	単	2003年01月	鳴尾説林 10号	イギリス、あるいは英語で出版された出版物の目録であるNSTCから1801年から1919年に刊行された日本関連書を抽出し、その刊行点数推移について考察した。19世紀から20世紀初頭、日本関連書の出版点数は著しく増加しており、特に（1）1851-1890年、（2）1891-1910年に顕著な増加がみられる。この時期は日本のみならず、欧米の出版界にとっても大きな変化の時期であり、国際出版市場というべきグローバルな市場の形成へと移行していたことが予想される。世界の情報流通に変化が生じていた時期なのであり、日本関連書の出版点数の増大は、日本の開国という要因と共に、欧米出版社による出版市場の拡大という動向も視野に入れるべきことを論じた。（pp. 13～21）
17. 明治期日本出版と出版離陸、その 後―翻訳・輸入と海外出版市場―	単	2001年11月	鳴尾説林 第9号	1890年代初頭にみられる日本出版の変化について考察した。外国書籍の翻訳・輸入は、日本の開国に伴って隆盛を誇ったが、1890年代初頭には激減していることが確認できる。そしてその時期から、日本出版社と海外出版社との提携出版が行われるようになっていく。それは欧米出版社の、国際出版市場形成の動向と密接に関わるものであった。近代出版への新たな段階を迎えようとしていた日本出版の動向を、日本国内の事情のみならず、国際出版市場との関わりの中で明らかにすべきことを論じた。（pp. 1～12）
18. 大坂出版界形成期における書肆の 動向―一六七〇～一六八九年の刊 行状況から―	単	2001年09月	武庫川国文 58号	書物の刊行状況の検討から、大坂出版業の形成期を1671年から1889年とし、第Ⅰ期（1671～1677）、第Ⅱ期（1678～1685）、第Ⅲ期（1686～1689）の3段階に分けて考察した。第Ⅰ期は京都書肆の影響が濃厚で、京都の庇護の下に活動が展開されていた時期、第Ⅱ期は京都資本に頼らず、自律的な活動を志向する書肆が現れた時期、第Ⅲ期は、京都・江戸と並ぶ出版界へと成長を果たし、他都市と対等の提携関係を結ぼうとした自律的な書肆が中心となった時期であったと位置づけた。（pp. 31～41）
19. 語りから印刷本へ―メディア論『 好色一代男』の試み―	単	2000年12月	武庫川国文 56号	『好色一代男』における「印刷テキスト」としての特徴について考察した。その結果、『一代男』は反復して読み、また挿絵に目を通すことによって、西鶴の意図が強烈なメッセージとなるような多層構造であり、凝った統一的な構成がとられていることを明らかにした。西鶴の浮世草子の特徴としては「咄

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
20. 益軒本の誕生—好古の死と出版メディアの転換—	単	2000年11月	鳴尾説林 8号	の方法」が重視されてきたが、『一代男』の方法は、「一回性」を原則とする「咄の方法」とは異なった、「印刷本の方法」といべきものなのである。西鶴の方法として強調すべきは、文字テキスト、印刷本の特徴を最大限に引き出してみせたところにあるのであり、そのような以後の社会のあり方を先駆的に示した点に、西鶴の画期性を認めるべきであることを論じた。(pp.125~137)
21. 西鶴『椀久一世の物語』の出版事情—書肆森田庄太郎の関与—(査読付)	単	1998年10月	文学・語学 161号	近代に至るまで大衆の知の形成に大きな役割を果たした「益軒本」誕生までの事情について考察した。従来貝原益軒は、内的な発展性から元禄12年を境に通俗的啓蒙書への意識を明確にし、それが「益軒本」として結実したとされる。しかし序文や跋文の検討からは、甥の好古が、早い段階からそのような読者への意識を明確にしていた。益軒は好古の著作に全面的な協力をみせており、さらには上方書肆の一派が連合して好古の著作に参画していた。「貝原先生」となるべき著作者として期待されていたのは好古なのであった。しかし元禄13年37歳で好古が没したことにより、新たな著作者としての役割は益軒へとシフトしていくこととなり、「益軒本」の誕生がみられたのである。(pp.1~20)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 西鶴作品にみられる中国説話	共	2008年02月29日	東アジアにおける文化交流の諸相—さらなる相互理解と友好のために—(関西文化研究センター第5回国際学術交流フォーラム) 於・中国 山東大学	西島孜哉との共同発表。
2. 大阪の人々の拠り所—大阪の歴史からみて—	共	2007年12月01日	人間文化のあり方—日中の人々は何をどのように大切にしているのか—(関西文化研究センター第4回国際学術交流フォーラム) 於・中国 西安交通大学	西島孜哉との共同発表。
3. 芸術・芸能生成の文化的土壌についての相関的研究	単	2007年03月02日	関西文化研究センター第2回ワークショップ	
4. 西鶴の世界観—女護島と瀬戸内—	共	2005年09月12日	人間文化の諸相と東アジア—異文化とは何か—(関西文化研究センター第2回国際学術交流フォーラム) 於・韓国 韓南大学	西島孜哉との共同発表。
5. 江戸時代上方における草紙屋の動向—塩屋長兵衛の活動—	単	2005年03月22日	関西文化研究センター第1回ワークショップ	
6. 西鶴の創造世界—「仕出し」という新機軸—	共	2005年03月05日	中国と日本—関西文化の共通性と創造性—(関西文化研究センター第1回国際学術交流フォーラム) 於・中国 大連理工大学	西島孜哉との共同発表。
7. 上方浮世絵の周辺—出版都市大坂の魅力—	単	2004年11月30日	第7回MKCRセミナー	武庫川女子大学の所蔵となった上方浮世絵コレクションを紹介すると共に、上方浮世絵をめぐる文化事情の一端について考察した。
8. Late Edo Literati Salons in Kyoto and Osaka: Kyoka Poets, Artists and Kabuki Actors	単	2004年04月	Japan Reseach Centre Seminar (於ロンドン大学SOAS)	江戸時代上方の狂歌サロンへの絵師、歌舞伎役者の参加について論じた。(英語)
9. The Role of "Author Brand" Books in Commercializing Publis	共	2002年07月12日	SHARP (国際書物文化史学会、第10回大会) 於	Amadio Arboleda 日本において幾人かの「著者」がブランド化され、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
hing in Japan			ロンドン大学)	それらの著作が商品化されていった様相を、出版業の発展、著者意識の発達、読者の成長といった観点から論じた。(英語発表)
10. 大坂出版界形成期における書肆の動向—1671～1689年の刊行状況から—	単	2000年05月20日	日本出版学会(平成12年度春季研究発表会・於フェリス女学院大学)	大坂の出版業の始まりである1671年(寛文11年)から、出版業が軌道にのった1689年(元禄2年)までの刊行状況の分析から、第Ⅰ期(1671年～1677年)、第Ⅱ期(1678年～1685年)、第Ⅲ期(1686年～1689年)の3期に分け、大坂出版界の発展過程とその特色について考察した。
11. 西鶴と演劇—『椀久一世の物語』の出版を通して—	単	1997年10月26日	全国大学国語国文学会(平成9年度秋季大会・於同志社女子大学)	西鶴の交遊サークルへの書肆森田庄太郎の積極的な関与の可能性を指摘し、西鶴のモデル小説的方法の獲得は、森田の要求によって果たされたと結論した。
12. 岡田三郎右衛門と森田庄太郎の出版活動—西鶴と出版書肆との相関の前提—	単	1996年10月26日	日本近世文学会(平成8年度秋季大会・於同朋大学)	西鶴との影響関係が注目されてきた岡田三郎右衛門と森田庄太郎について、書肆活動の全容を報告した。両書肆は大坂出版界の草創期から出版業に関わり、西鶴本の刊行によって地歩を固めた後、大きく発展した点に共通性がみられる。しかし岡田が元禄初期までは西鶴を自己の出版活動の最重要作者として位置づけていたのに対して、森田は京都出版界との繋がりを背景に、より幅広い視野で作者を獲得しつつ出版活動を行っていたことを明らかにした。
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 第22回日本出版学会賞奨励賞受賞	単	2001年05月	日本出版学会	著書『西鶴と出版メディアの研究』および関連する研究成果に対して授与された。
6. 研究費の取得状況				
1. 科学研究費補助金 若手研究(B) 継続	単	2006年04月	文部科学省	採択課題名「江戸時代上方における絵入り出版物の生成環境についての研究」。50万円の助成を受けた。2年間で計110万円の助成を受けた。課題番号:17720039。
2. 科学研究費補助金 若手研究(B) 新規	単	2005年04月	文部科学省	採択課題名「江戸時代上方における絵入り出版物の生成環境についての研究」。60万円の助成を受けた。課題番号:17720039。
3. 科学研究費補助金(奨励研究) 新規	単	2002年04月	日本学術振興会	採択課題名「日本近代出版メディア形成期における新興出版社の動向—博聞社の活動を中心に—」。24万円の助成を受けた。課題番号:14902011。
4. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費) 継続	単	2001年04月	日本学術振興会	採択課題名「貞享・元禄期における作者と出版環境との相関についての研究」。100万円の助成を受けた。3年間で計320万円の助成を受けた。
5. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費) 継続	単	2000年04月	日本学術振興会	採択課題名「貞享・元禄期における作者と出版環境との相関についての研究」。100万円の助成を受けた。
6. 科学研究費補助金(研究成果公開促進費) 新規	単	2000年04月	日本学術振興会	学術図書「西鶴と出版メディアの研究」の出版助成として120万円の補助を受けた。課題番号:125164。
7. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費) 新規	単	1999年04月	日本学術振興会	採択課題名「貞享・元禄期における作者と出版環境との相関についての研究」。120万円の助成を受けた。
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2009年04月～2012年03月	日本出版学会関西委員会委員			
2. 1999年12月～現在	日本出版学会			
3. 1996年04月～現在	全国大学国語国文学会			
4. 1994年06月～現在	日本近世文学会			